

『文選集注』江淹「雜体詩」訳注（八）

殷東陽（興矚）仲文

小田 健太

〔押韻〕

○趣・遇・樹・務（去声十遇）

○素・慕（去声十一暮）

○慮（去声九御）

〔校勘〕

01 晨遊任所萃 「晨遊任所萃」〔陳八郎本〕

06 蕙色出喬樹 「蕙色出喬樹」〔尤刻本・胡刻本・国子監

本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〕

10 払衣積塵務 「払衣積塵霧」〔陳八郎本〕

〔訳〕

早朝に出かけて目に飛び込んでくる外景に心をゆだね、のんびりとして道の理を心中に積み重ねる。雲を浮かべる空は（私の心と同様）高々と澄んでおり、今この時に山水を味わう心境に邂逅した。青々とした松は美しい花を抜けて出してすつくと伸び、愛嬌のあるその色は高い樹木にさしている。遠く清らかに波立ったつぷりとした水流を見やると、はるか向こうの崖の、石の白さに照り映えている。（種

- 01 晨遊任所萃 晨に遊んで萃まる所に任せ
- 02 悠々蘊真趣 悠悠として真趣を蘊む
- 03 雲天亦遼亮 雲天 亦た遼亮たり
- 04 時与賞心遇 時に賞心と遇う
- 05 青松挺秀萼 青松 秀萼を挺で
- 06 蕙色出喬樹 蕙色 喬樹に出づ
- 07 極眺清波深 極めて清波の深きを眺め
- 08 緬映石壁素 緬かに石壁の素きに映ず
- 09 瑩情無余滓 情を瑩いて余滓無く
- 10 払衣積塵務 衣を払いて塵務を積つ
- 11 求仁既自我 仁を求むるは既に我自りす
- 12 玄風豈外慕 玄風 豈外に慕わんや
- 13 直置忘所幸 直置として 幸る所を忘れ
- 14 蕭散得遺慮 蕭散として慮を遺るるを得

々の景色に)心は磨かれて澁みはなくなり、衣服を払って俗事を捨て去る。仁を求める意志は自分自身より発したものであってみれば、道の教えについても外界への煩雑な人間社会)から学び取るうとは思わない。ひたすらに、自らを主導するわずかな束縛すら忘れ、意識を霧散させ俗塵を忘れる境地をえたのであった。

【殷東陽(興囑)仲文】

鈔曰、囑、眺也。興、起也。謂晨旦早起。仲文於時為東陽太守。山逼海、故旦起眺望而作是詩也。在本集中、文通擬之。仲文無名、陳郡人。祖融吏部尚書、父康侍中。

王韶晋紀云、仲文少有才、美容貌。桓玄姊夫。玄甚悅之、引為諮議參軍。

晋安帝紀、玄時、王謐見礼而不親、卞範雖親而不礼、寵遇隆重、兼於王・卞矣。居晋朝、為侍中・左衛。輿馬・器服、窮極綺麗、後庭妓妾數十人、糸竹不絶音。高祖誅玄、引為長史。仲文自以名輩先達、常怏々失志、乃出為東陽郡守。照鏡不見其面。

續晋陽秋云、劉毅博才好士。以仲文早有令名、深相礼重。何無忌甚慕之、自以進達之、令府中才子孫闡・孔籥之徒、並稱撰文義以待焉。仲文既失志、怏忽不知如此、遂相忌疎、唯遣賤疏而已。無忌甚以邀忽而輕也。大以為憾、及朝臣議欲北代、無忌曰、方今殷仲文・桓玄為腹心之疾。捨近事遠、非長策也。遂因此而陷仲文焉。

雜説云、謝靈運謂仲文曰、若讀書半袁豹、則文史不減班固。又桓玄九錫、仲文所製也。

鈔に曰う、囑は、眺むるなり。興は、起つなり。晨旦に早く起つを謂う。仲文は時に東陽太守為り。山は海に通る、故に旦に起ち眺望して是の詩を作るなり。本集中に在りて、文通之に擬う。仲文 名無し、陳郡の人。祖の融は吏部尚書、父の康は侍中と。

王韶の晋紀に云う、仲文少きより才有り、容貌美し。桓玄の姉の夫なり。玄甚だ之を悦び、引きて諮議參軍と為すと。

晋安帝紀に、玄の時、王謐礼を見すも親しまず、卞範親しむと雖も礼せず、寵遇の隆重なること、王・卞を兼ねぬ。

晋朝に居りては、侍中・左衛と為る。輿馬・器服は、綺麗を窮極し、後庭の妓妾 数十人、糸竹 音を絶やさず。高祖は玄を誅し、引きて長史と為す。仲文は自ら名輩先達なるを以てし、常に怏怏として志を失し、乃ち出でて東陽郡守と為る。鏡に照らすも其の面を見ずと。

続晋陽秋に云う、劉毅は博才にして士を好む。仲文の早に令名有るを以て、深く相い礼重す。何無忌は甚だ之を慕い、自ら以て之を進達せんとし、府中の才子孫闡・孔審の徒をして、並稱して文義を撰せしめて以て待つ。仲文 既に志を失して、怏怏として此くの如きを知らず、遂に相い忌疎し、唯賤を遣りて疏なるのみ。無忌甚だ遯忽なるを以て軽んずるなり。大いに以て憾みと為し、朝臣の議の北伐せんと欲するに及んで、無忌曰く、方に今 殷仲文・桓玄は腹心の疾為り。近きを捨てて遠きを事とするは、長策に非ざるなりと。遂に此れに因りて仲文を陥ると。

雑説に云う、謝靈運 仲文に謂いて曰く、若し読書 袁豹に半ばすれば、則ち文史 班固に減ぜずと。又桓玄の九錫は、仲文の製る所なりと。

〔訳〕

鈔にいう、「囑とは眺めるといふことである。輿とは出発するといふことである。朝早く出発するといふことである。殷仲文は時に東陽太守であった。山は湖に肉薄しており、その景色を眺めるために朝早くに出発し、この詩を詠じたのである。別集に詩が収録されており、江淹はそれに擬えたのである。仲文は名が伝わっておらず、陳郡の人である。祖父の融は吏部尚書を、父の康は侍中を務めた」と。

王韶の晋紀にいう、「殷仲文は若い頃から才知があり、また美しい容貌を持っていた。桓玄の姉を娶ったため、玄はそれを大変に喜び、殷仲文を諮議参軍の役職に抜擢した」と。

晋安帝紀にいう、「桓玄の治世下で、王謐は礼遇されたが身近に仕えさせてはもらえず、(その逆に)卞範は身近に仕えたが礼遇はされなかった。殷仲文への待遇は、王謐と卞範を兼ねたような手厚いものであった。晋朝に仕えるようになってからは、侍中・左衛を歴任した。馬車や器物、服飾は華美を極め、後庭の娼妓は数十人を数え、日夜音楽を絶やさなかった。(宋朝の)高祖(劉裕)は桓玄を誅殺し、

殷仲文を引き抜いて長史とした。殷仲文は自ら名望ある道徳者であると自負し、(そうであるにも関わらずそうした自負に見合う地位に就けなかつたために)常に不満を抱いており、東陽郡守に遷った。(後に)鏡に映しても顔が見えないという凶兆が表れた」と。

続晋陽秋にいう、「劉毅は博才にして士人を好んだ。殷仲文の名は早くに伝わっていたため、劉毅は彼を十分な礼によつて重んじた。何無忌は殷仲文を非常に敬慕し、自ら彼を出世させようとして、役所の才人である孫闡や孔審といった連中に並びに文章を書かせて待ち受けていた。ところが殷仲文は、このとき志を失つて恍惚とした状態となつていたためにこうした状況を知らずについて疎遠になつてしまひ、後にただ手紙を書き送つたに過ぎなかつた。何無忌は殷仲文が傲慢であるのを知つて軽蔑した。何無忌は一連の経緯を大いに遺憾に感じ、朝臣の議論が北伐の決行に傾くと、次のように述べた。「正しく今、殷仲文と桓玄はこの国にとつて障害である。近くの懸案には手を加えずに捨て置き、遠くの懸案にばかり心を砕いて従事するのは得策ではない」と。こうした発言によつて殷仲文はついに陥れら

れた」と。

雑説にいう、「謝靈運は殷仲文にいった、「もしも読書量が袁豹の半分ほどにでも達したならば、文章は班固にも劣らないものとなるだろう」と。また、桓玄の作とされる「九錫」は、殷仲文によつて書かれたものであつた」と。

〔注〕

①興矚 出典と見なしうる適当な先行例は目睹しがたい。従つて、鈔が解くように、一字一字の字義から熟語としての意味を類推するのが妥当である。

②本集 『隋書』卷三十五・経籍志には、「晋東陽太守殷仲文集七卷、梁五卷」と見えているが、遼欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』によれば、詩は「南州桓公九井作詩」(『文選』卷二十二)、「送東陽太守詩」(『芸文類聚』卷二十九)、及び「入剡詩」(『文選』卷六十注引)の断片二句が伝わるのみ。ただし、「殷東陽(興矚)仲文」(以下、「当該詩」)がすでにそうであるように、後世に対する影響は小さくなかつたようで、庾信「枯樹賦」(『庾子山集注』卷一)の序には、「殷仲文風流儒雅、海内知名。世異時移、出為東陽太守。常忽

忽不樂、顧庭槐而嘆曰、「此樹婆娑、生意尽矣」（殷仲文は風流儒雅にして、海内に名を知らる。世異り時移り、出だされて東陽太守と為る。常に忽忽として樂しまず、庭の槐を顧みて嘆じて曰く、「此の樹の婆娑たるは、生意尽きたり」と）と見えている。これは『世説新語』黜免篇の一節である、「桓玄敗後、殷仲文還為大司馬咨議、意似二三、非復往日。大司馬府聽前、有一老槐、甚扶疏。殷因月朔、与衆在聽、視槐良久、歎曰、「槐樹婆娑、無復生意」（桓玄敗れて後、殷仲文還りて大司馬の咨議と為るも、意二三にして、復た往日に非ざるに似たり。大司馬府の聽前に、一老槐有り、甚だ扶疏たり。殷は月朔に因りて、衆と与に聽に在り、槐を視ること良久しくして、歎じて曰く、「槐樹 婆娑として、復た生意無し」と）に基づくものである。『世説新語』によれば、殷仲文が槐を見て歎きを吐露したのは咨議參軍のときのことであつたと見なせるが、庾信は東陽太守に転出した後のこととして記している。この点については清・顧炎武『日知録』卷十九「仮設之辞」に「古人為賦、多仮設之辞。序述往事、以為点綴、不必一一符同也。……。庾信「枯樹賦」、既言殷仲文出為東陽太守。……（古人 賦を

為すに、仮設の辞多し。往事を序述して、以て点綴を為すに、必ずしも一一符同せざるなり。……。庾信の「枯樹賦」は、既に殷仲文出でて東陽太守と為ると言う。……。」という指摘がある。「仮設」とは、典故人物の境遇を仮構して作中に取り入れることである。こうした手法に関して、加藤国安『越境する庾信（上）——その軌跡と詩的表象』（研文出版、二〇〇四）は以下のように指摘している（なお、本項目の記述は同書によるところが大きい）。「……、この政治家殷仲文の投降、および帰順後の苦惱は庾信のそれになり近似する。そこで庾信は、「仮設」法を用いて、殷仲文の悲劇性を強調して憂悶に沈む自己の現況を鮮明化しようとしたのだろう。それゆえにこそ、あえて東陽太守に移された後のことと改変しているのだと考えられる」（二九〇頁）。ちなみに、駱賓王「在獄詠蟬」（『全唐詩』卷七十八）の序に、「有古槐数株焉。雖生意可知、同殷仲文之古樹（古槐 数株有り。生意知る可しと雖も、殷仲文の古樹に同じ）」とあるのなどは、庾信に連なる類型表現である。

③王韶晋紀云：『晋書』卷九十九・殷仲文伝の冒頭に、「殷仲文、南蠻校尉覬之弟也。少有才藻、美容貌。従兄仲

堪薦之於会稽王道子。即引為驃騎參軍、甚相賞待。俄轉諮議參軍、後為元顥征虜長史。会桓玄与朝廷有隙、玄之姉、仲文之妻、疑而問之、左遷新安太守。仲文於玄雖為姻親、而素不交密、及聞玄平京師、便棄郡投焉。玄甚悦之、以為諮議參軍（殷仲文は、南蠻校尉 覬の弟なり。少くして才藻有りて、容貌美し。従兄の仲堪は之を会稽王の道子に薦む。即ち引きて驃騎參軍と為し、甚だ相い賞待す。俄かに諮議參軍に轉じ、後に元顥の征虜長史と為る。会たま桓玄朝廷と隙有り、玄の姉は、仲文の妻にして、疑いて之を問て、新安太守に左遷さる。仲文 玄に於けるや姻親為りと雖も、素より交密せず、玄の京師を平らぐるを聞くに及んで、便ち郡を棄てて投ず。玄甚だ之を悦び、以て諮議參軍と為す）」とある（傍点部が集注と同じ内容の記述となっている。「王韶晋紀」とは、『隋書』卷三十三・経籍志に記載されている、「晋紀十卷、宋吳興太守王韶之撰」を指すのである。

④ 晋安帝紀：『世説新語』品藻篇の「旧以桓謙比殷仲文。桓玄時、仲文入、桓於庭中望見之、謂同坐曰、「我家中軍、那得及此也」（旧桓謙を以て殷仲文に比す。桓玄の時、

仲文入り、桓は庭中に於いて之を望見し、同坐に謂いて曰く、「我が家の中軍、那ぞ此れに及ぶを得んや」と）」という一節に引く注に、「晋安帝紀曰、仲文有器貌才思（晋安帝紀に曰う、仲文は器貌才思有り）」とある。

先にも引いた『世説新語』黜免篇の「桓玄敗後、殷仲文還為大司馬咨議、意似二三、非復往日。大司馬府聽前、有一老槐、甚扶疏。殷因月朔、与衆在聽、視槐良久、歎曰、「槐樹婆娑、無復生意」という一節に引く注には、「晋安帝紀曰、桓玄敗、殷仲文歸京師。高祖以其衛從二后、且以大信宣令、引為鎮軍長史。自以名輩先達、位遇至重。而後來謝混之徒、皆疇昔之所附也、今比肩同列。常快然自失、後果徙信安（晋安帝紀に曰う、桓玄敗れて、殷仲文は京師に歸る。高祖は其の二后を衛從するを以て、且つ大信の宣令するを以て、引きて鎮軍長史と為す。自ら名輩先達にして、位遇は重きに至るを以てす。而して後來 謝混の徒は、皆疇昔の附する所なるも、今は肩を比べて列を同じくす。常に快然として自失し、後に果たして信安に徙ると）」とある。

また、同じ黜免篇の「殷仲文既素有名望、自謂必当阿衡

朝政。忽作東陽太守、意甚不平。及之郡、至富陽、慨然歎曰、「看此山川形勢、當復出一孫伯符」(殷仲文 既に素より名望有り、自ら必ず當に朝政に阿衡たるべしと謂う。忽ち東陽太守と作り、意甚だ平らかならず。郡に之くに及んで、富陽に至り、慨然として歎じて曰く、「此の山川の形勢を看るに、當に復た一の孫伯符を出だすべし」と)という一節に付された注に、「晋安帝紀曰、仲文後為東陽、愈憤怒、乃与桓胤謀反、遂伏誅。仲文嘗照鏡不見頭、俄而難及(晋安帝紀に曰う、仲文は後に東陽と為り、愈いよ憤怒し、乃ち桓胤と与に謀反して、遂に伏誅せらる。仲文嘗て鏡に照らすも頭を見ず、俄かにして難及ぶと)と見えている。なお、鏡に自分の姿が映らなかつたという逸話は、殷仲文「南州桓公九井作」(『文選』卷二十二)の李善注に、「檀道鸞晋陽秋曰、殷仲文字仲文、陳郡人也。為驃騎行參軍。以桓玄之姊夫、玄僭立用為長史。帝反正、出為東陽太守、愈益憤怒。後照鏡不見其面、數日禍及(檀道鸞の晋陽秋に曰う、殷仲文 字は仲文、陳郡の人なり。驃騎行參軍と為る。桓玄の姉の夫なるを以て、玄は僭立して用て長史と為す。帝反正して、出でて東陽太守と為り、愈いよ憤怒を益す。

後に鏡に照らすも其の面を見ず、數日にして禍及ぶ」とある。

⑤續晋陽秋云：『世說新語』言語篇の「桓玄既篡位後、御牀微陷、群臣失色。侍中殷仲文進曰、「當由聖德淵重、厚地所以不能載」。時人善之(桓玄 既に位を篡いて後、御牀微かに陥り、群臣 色を失う。侍中殷仲文 進みて曰く、「當に聖徳の淵重なるに由り、厚地も載する能わざる所以なるべし」と。時人 之を善しとす)」という一節に、「続晋陽秋曰」として引かれている注に次のように見えている。「仲文字仲文、陳郡人。祖融太常、父康吳興太守。仲文聞玄平京邑、棄郡投焉。玄甚説之、引為咨議參軍。時王謐見礼而不親、卞範之被親而少礼。其寵遇隆重、兼於王・卞矣。及玄篡位、以佐命親貴、厚自封崇。輿馬・器服、窮極綺麗、後房妓妾數十、糸竹不絶音。性甚貪吝、多納賄賂、家累千金、常若不足。玄既敗、先投義軍。累遷侍中・尚書。以罪伏誅(仲文 字は仲文、陳郡の人。祖の融は太常、父の康は吳興太守。仲文 玄の京邑を平らぐるを聞き、郡を棄てて投ず。玄 甚だ之を説び、引きて咨議參軍と為す。時に王謐は礼せらるるも親しまれず、卞範之は親しまるるも礼

少なし。其の寵遇の隆重なること、王・卞を兼ね。玄の位を纂うに及ぶや、佐命を以て貴きに親しみ、厚く自ら封崇たらんとす。輿馬・器服は、綺麗を窮極し、後房の妓妾は数十にして、糸竹は音を絶やさず。性甚だ貪吝たんりんにして、多く賄賂を納れ、家は千金を累ぬるも、常に足らざるが若し。玄既に敗れては、先に義軍に投ず。侍中・尚書に累遷す。罪を以て誅に伏す」。『統晋陽秋』は、『隋書』卷三十三・経籍志に、「統晋陽秋二十卷、宋永嘉太守檀道鸞撰」と見えている。

⑥雑説云：『雑説』は、『隋書』卷三十四・経籍志に、「雑説二卷、沈約撰」とある。長谷川滋成『文選鈔』の引書（『日本中国学会報』第三二集、一九八〇）は、『太平御覽』卷二十二の佚文を引いた上で、『鈔』に引く『雑説』と『太平御覽』に引くものが、沈約の文であれば、それは人物の逸話や種々の雑事を内容とする書物であつたらしい（一五六頁）と述べ、集注の引用がただちに沈約の『雑説』であるとの判断は避けている。内容に異同があるのでそれについても言及しておきたい。『世説新語』文学篇には、「殷仲文天才宏瞻、而讀書不甚広博。亮歎曰、「若使殷仲文

讀書半袁豹、才不減班固」（殷仲文は天才 宏瞻なるも、書を読むこと甚だしくは広博ならず。亮歎じて曰く、「若し殷仲文をして書を読むこと袁豹に半ばせしむれば、才は班固に減ぜざらん」と）というように、集注が謝靈運の言として引いていたのとは異なつて、傅亮（余嘉錫の注に従つて「亮」は傅亮を指すものとして解しておく）の発言として記述されている（『晋書』本伝は集注と同様、謝靈運の発言とする）。また、『世説新語』の注には、「統晋陽秋曰、仲文雅有才藻、著文数十篇（統晋陽秋に曰う、仲文は雅にして才藻有り、文数十篇を著すと）」と見えている。「九錫」に關する一節については、『晋書』本伝にも「玄九錫、仲文之辞也（玄の九錫は、仲文の辞なり）」と記されている。

01 02 【晨遊任所萃 悠々蘊真趣】

李善曰、毛萇詩伝曰、萃、集也。方言曰、蘊、積也。莊子曰、道之真以持身。謝靈運登江中孤嶼詩曰、蘊真誰為伝。鈔曰、晨、旦也。遊、行也。任、自得之意。所萃、聚也。

任意所適而觀望万物、聚於目中。真趣、道也。言蘊懷道德也。

音決、任、々之去声。蘊、紆粉反。

劉良曰、萃、聚也。言陵晨觀万物、並聚於目中。悠々然蘊積至道之真趣也。

李善曰く、毛萇の詩伝に曰う、萃は、集まるなりと。方言に曰う、蘊は、積むなりと。莊子に曰う、道の真は以て身を持すと。謝靈運の江中の孤嶼に登る詩に曰う、真を蘊めども誰か伝うるを為さんと、と。

鈔に曰う、晨は、旦なり。遊は、行くなり。任は、自得の意。所萃は、聚まるなり。意の適く所に任せて万物を觀望し、目中に聚む。真趣は、道なり。道德を蘊懷するを言うなり。

音決に、任、任の去声。蘊は、紆粉の反と。

劉良曰く、萃は、聚まるなり。言うところは陵晨に万物を觀、並びに目中に聚む。悠々然として至道の真趣を蘊積するなりと。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（「李」字無し）（明州本・秀州本・建州本）

○道之真以持身 「道之真以治身」（明州本・秀州本・建州本）

○劉良曰 「良曰」（「劉」字無し）（陳八郎本・明州本・

秀州本・建州本）

○萃、聚也 「萃、聚。蘊、積也」（明州本・陳八郎本・

秀州本）

○觀 「觀望」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○悠々然 「悠悠」（「然」字無し）（陳八郎本・明州本・

秀州本・建州本）

○也 この字無し（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、「毛萇の詩伝にいう、萃とは、集まるということであると。『方言』にいう、蘊とは、積むということであると。『莊子』にいう、道の真髓とは身を養うことであると。謝靈運の「江中の孤嶼に登る詩」にいう、（永嘉江中の

島をめぐる景物は) 神仙世界に連なる真理を内包しているものの、それを伝える者はいないと」と。

鈔にいう、「農とは、且ということである。遊とは、行くということである。任とは、自得するという意味である。所萃とは、聚まるということである。心の赴くままに任せて万物を眺めやり、目のうちに種々の景物を集める。真趣とは、道のことである。道徳を懷中に積み上げるといふことをいうのである」と。

『音決』にいう、「任は、任の去声である。蘊は、紆粉の反である」と。

劉良はいう、「萃とは、聚まるということである。朝に万物を觀覽し、くさぐさの景物を目の中に集め、のんびりとして道の真髓を積み重ねることをいうのである」と。

〔注〕

①毛萇詩伝曰：『詩経』国風・陳風「墓門」に、「墓門有梅、有鶉萃止。夫也不良、歌以訊之。訊予不顧、顛倒思予（墓門に梅有り、鶉有りて萃まる。夫や良からず、歌つて以て之に訊ぐ。訊ぐれども予を顧みず、顛倒して予を思

わん）」（全二章中の第二章）と見えており、第二句に対する毛伝には、「鶉、悪声之鳥也。萃、集也（鶉は、悪声の鳥なり。萃は、集まるなり）」とある。つまり「墓門」における「萃」字は、「鶉」のような具体的な特定の対象について用いられているのである。『文選』に収録されている当該詩以外の作品に目を配るならば、潘尼の「贈侍御史王元凱」（卷二十四）に、「遊鱗萃靈沼、撫翼希天階（遊鱗 靈沼に萃まり、撫翼 天階を希う）」と詠じられており、これは集まる主体（ここでは泳ぐ竜）が明示されている例である。任昉「贈郭桐廬、出溪口見候、余既未至、郭仍進村、維舟久之、郭生方至（郭桐廬に贈る、溪口を出でて候せらるるに、余既に未だ至らず、郭は仍りて村に進む、舟を維ぐこと之を久しくして、郭生方めて至る）」（卷二十六）には、「望久方来萃、悲歎不自持（望むこと久しくして方めて来たり萃まり、悲と歎と自ら持せず）」とあり、集まる対象は明示的ではないものの、文脈上、任昉とその友人である郭峙の邂逅を表現しているのは間違いない。また、陸機「擬古詩十二首」（擬行行重行行）（卷三十）に、「佇立想万里、沈憂萃我心（佇立して万里を想い、沈憂 我が心に萃まる）」と詠じ

られているように、「萃」は「心」のような抽象的な語をとることもできる。ここまで取り上げてきたいずれの例も、目に映る不特定の外景を詠じているわけではないため、そこに「萃」字の用い方に関する当該詩の特徴があると考えられる。

②方言曰：『方言』卷十二に、「蘊・齋、積也（蘊・齋は、積むなり）」とある。

③莊子曰：『莊子』讓王篇に李善所引の一節が見えている。「持」は「治」に作るのが正しい。『呂氏春秋』仲春紀・貴生にも『莊子』讓王篇と同様の記述があり、そこでは該当部分を「持」に作っているので、それと混同したのか。道を体得した顔闔を魯君が招こうとしたが、望み通りにはならなかったという経緯の説明が続いて、次のように述べられている。「故曰、道之真以治身、其緒余以為国家、其土苴以治天下。由此觀之、帝王之功、聖人之余事也、非所以完身養生也。今世俗之君子、多危身棄生以殉物、豈不悲哉（故に曰く、道の真は以て身を治め、其の緒余は以て国家を為め、其の土苴は以て天下を治むと。此れに由りて之を觀れば、帝王の功は、聖人の余事なり、身を完う

し生を養う所以に非ざるなり。今の世俗の君子、多くは身を危うくし生を棄てて以て物に殉う、豈悲しからずや）。道の真髓は身を養う点にこそあるのであり、天下国家を治めるのはその余技に過ぎないというのである。これを踏まえて当該詩について考えてみるならば、公的な場へと赴くことを目的としない気ままな散策によつて、道の真髓を感得するに至つたことを詠じているのであろう。無目的な行為が、かえつて道における価値的境地を誘引するのである。

④謝靈運登江中孤嶼詩曰：『文選』卷二十六。全十四句中、第七句以降の四句に、「雲日相輝映、空水共澄鮮。表靈物莫賞、蘊真誰為伝（雲日 相い輝映し、空水 共に澄鮮たり。靈を表すも物の賞する莫く、真を蘊めども誰か伝うるを為さん）」と詠じられている。「蘊真」に関連する李善注には、「馬融論語注曰、蘊、藏也。説文曰、真、仙人變形也（馬融の論語の注に曰う、蘊は、藏なりと。説文に曰う、真は、仙人の變形なりと）」と見えている。当該詩と謝靈運の詩は「蘊真」の語を詠じている点で共通するが、それぞれに対する李善の注は異なっているわけである。すな

わち、「蘊」について当該詩の場合には『方言』を根拠に「積」と解し、謝靈運詩の場合には「馬融論語注」を根拠に「蔽」と解している。また、「真」について当該詩の場合には『莊子』を引き、謝靈運詩の場合には『説文解字』を引いている。

⑤所萃 李善の引く「毛萇詩伝」及び劉良が「萃、〇也」と注しているのに対し、鈔は「萃」に「所」を冠している。この場合の「所」は、例えば江藍生・曹広順編著『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九七）に、「語助詞、多用在及物動詞前面、不為義」（三五二頁）とあるように実質的な意味のないものと解釈できよう。

⑥任、々之去声 集注においてはそれほど数の多くない声調注である。狩野充徳『文選音決の研究』（溪水社、二〇〇〇）によれば、集注に引く『音決』の内訳は、「反切」が一七九五種、延べ三六九一か所、「直音」が六〇六種、延べ一五六〇か所、そして「声調注」が一〇種、延べ一五か所であるという（九頁）。「任」には平声と去声とがあり、平声の場合には「になう」「いだく」などの意に、去声の場合には「まかす」の意になる。

⑦目 底本は判読しにくくなっているため、諸本によって「目」字を補った。

○殷仲文「南州桓公九井作」（『文選』卷二十二）には、「哲匠感蕭晨、肅此塵外軫（哲匠 蕭晨に感じ、此の塵外の軫を肅む）」（全二十句中の第十三・十四句）とある。「哲匠」すなわち桓玄の行為について述べる句ではあるものの、当該詩冒頭の二句と同様、朝の出立が描写されている。

03 04 雲天亦遼亮 時与賞心遇

李善曰、莊子^①曰、夫道、黄帝得之、以登雲天。謝靈運田南樹園詩曰、賞心不可忘。

鈔曰、遼、虚廊也。亮、明（也。明）即寅旦明廊之時、賞心、得意（賞）識也。言良時識我心而相会也。

呂向曰、遼、高也。言雲天既高明後、与識我心者相遇也。

李善曰く、莊子に曰う、夫れ道、黄帝之を得て、以て雲天に登ると。謝靈運の田南樹園詩に曰う、賞心忘る可から

ずと、と。

鈔に曰う、遼は、虚廊なり。亮は、明らかなり。明とは即ち寅旦 明廊たるの時、賞心は、意を得て賞識するなり。

言うところは良時は我が心を識りて相い会うなりと。

呂向曰く、遼は、高きなり。言うところは雲天既に高明にして後、我が心を識る者と相い遇うなりと。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（「李」字無し）（明州本・秀州本・建州本）

○夫道 この二字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○呂向曰 「向曰」（「呂」字無し）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○遼、高也 「遼、高。亮、明也」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○高明後 「高明復」（陳八郎本・明州本・秀州本）、「高復」（「明」字無し）（建州本）

○識 「適」（明州本・秀州本・建州本）

○也 この字無し（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、『莊子』にいう、道というものについては、黄帝はそれを体得して雲の浮かぶ空へと上っていったと。謝靈運の「田南樹園」詩にいう、山水を楽しむ心は忘れられないものと。

鈔にいう、「遼とは、広々としたさまのことである。亮とは、明らかなさまである。そして明るいというのは寅の刻、すなわち早朝の明るく広々とした感じのする時間帯ということであり、賞心とは、（そうした外界の景物に）満足して賛美する心持ちのことである。（美的景観を演出する）好ましい時間帯がまるで自分の心情をくみ取ってくれたかのよう、折よくそうした時に遭遇したことを詠じているのである」と。

呂向はいう、「遼とは、高いさまである。雲の浮かぶ空が高々と明るくなって後に、自分の心情を解するような風景と遭遇したことをいう」と。

〔注〕

① 莊子曰：原文は大宗師篇にある。「夫道、有情有信、無為無形。可伝而不可受、可得而不可見。自本自根、未有天地、自古以固存（夫れ道は、情有り信有り、為す無く形無し。伝う可くして受く可からず、得可くして見る可からず。自ら本づき自ら根づき、未だ天地有らざりしとき、古より以て固より存す）」といったように、道についての説明を加えた上で、古の道の体得者（人間に限らない）を列挙している。そのうちの一人として、「黄帝得之、以登雲天（黄帝之を得て、以て雲天に登る）」というように「雲天」の語とともに黄帝が登場している。『文選』における「雲天」の他の用例としては、沈約「宋書謝靈運伝論」（巻五十）に「周室既衰、風流彌著。屈平・宋玉、導清源於前、賈誼・相如、振芳塵於後。英辭潤金石、高義薄雲天（周室既に衰えて、風流彌いよ著る。屈平・宋玉は、清源を前に導き、賈誼・相如は、芳塵を後に振るう。英辞は金石に潤られ、高義は雲天に薄る）」とある。文章や辞賦の内容の素晴らしさを比喩的に述べているのである。

② 謝靈運田南樹園詩曰：謝靈運「田南樹園激流殖援（田

南に園を樹てて流れを激ぎ援を殖う）」（『文選』巻三十）を指す。李善所引の句を対句と合わせて改めて引けば、「賞心不可忘、妙善冀能同（賞心 忘る可からず、妙善 冀わくは能く同じからん）」となる（全二十句中の末尾）。すなわち「賞心」の語の先行例を示したものである。謝詩の「賞心」について李善は注を付していない。「賞心」も含めた六朝期の詩における「賞」字について考察を加えた論考に、小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』（岩波書店、一九六二）に収録されている「賞」の意味するものがある。小尾氏は、謝靈運の詩に用いられている「賞心」及び「賞」字を分析した上で、「以上のごとく、「賞」の対象が、自然の山水であり、それをたのしみ味わう意味だとすれば、先の「賞心」の意味も、「自然の山水を賞む心」と見てよくはないだろうか。つまり「風流の心」のごとき意味である」（五四九頁）と述べている。また、当該詩については、同じく江淹「雜体詩三十首」（謝臨川（遊山）靈運）（『文選』巻三十一）の「靈境信淹留、賞心非徒設（靈境に信に淹し留まれば、賞心 徒に設けたるに非ず）」という詩句とともに例示しながら、「また前者の「殷仲文」をうたう詩に「賞

心」ということばを用いていることは、注意すべきことであつて、殷仲文を「賞心」を持つ人と考えたわけであるが、沈約の宋書の「謝靈運の伝の論」にも、／＼仲文始めて孫・許の風を革め、叔源大いに太玄の氣を変ず。／＼と論じているごとく、殷仲文は玄風の詩を更改しておおむね叙景的のものにしたというのであり、いま彼の「南州の桓公九井にて作る」（文選、卷二二）を見ると、かなり叙景的要素が含まれているようである。叙景的要素が多いことは、つまり自然に親しんだからであり、そのことは、謝靈運にも見られるように、「賞心」ということばとは無関係ではなさそうである」（五五一―二頁）と記す。なお、当該詩と同じように「賞心」と「遇」を組み合わせた例としては、謝朓（四六四―四九九）の「之宣城、出新林浦向版橋（宣城に之かんとして、新林浦より出で版橋に向かう）」（『文選』卷二十七）に、「鬻塵自茲隔、賞心於此遇（鬻塵 茲自り隔たれ、賞心 此に於いて遇う）」（全十二句中の第九・十句）と見えている。

③虚廓 「虚廓」の誤りであろう。そうであるとすれば広々としたさま。「廓」と「廓」は混用されることがあつた

ようで、例えば曹植「閑居賦」（『芸文類聚』卷六十四・宅舎）に、「入虚廓之閑館、歩生風之広廡（虚廓たる閑館に入り、風生ずる広廡に歩む）」とあるうちの「廓」を、百三家集本『陳思王集』卷之一は「廊」に作っている。これについて王魏『曹植集校注』（河北教育出版社、二〇一三）は、『芸文類聚』を採用して「空闊」の意に解している。鈔の下文に見えている「明廊」の「廊」字についても、ここでは「廓」字の意味で解釈した。

④賞識 『後漢書』卷六十八・許劭伝に、「許劭字子将、汝南平輿人也。少峻名節、好人倫、多所賞識。若樊子昭・和陽士者、並顕名於世。故天下言拔士者、咸称許・郭（許劭 字は子将、汝南平輿の人なり。少くして名節を峻くし、人倫を好み、賞識する所多し。樊子昭・和陽士の若き者、並びに名を世に顕す。故に天下は士を抜く者を言いて、咸許・郭と称す）」とあるように、すぐれた資質を見つけて出し、品評すること。

○当該詩の第三句には「雲」が描かれているが、これは他の「雑体詩」にも見受けられる布置である。「古離別」に「黄雲蔽千里、遊子何時還（黄雲 千里を蔽い、遊子 何

れの時にか還らん）、「李都尉（従軍）陵」に「日暮浮雲滋、握手淚如霰（日暮 浮雲滋く、手を握りて涙霰の如し）」、「郭弘農（遊仙）璞」に「優蹇尋青雲、隱淪駐精魄（優蹇として青雲を尋ね、隱淪として精魄を駐む）」、「謝法曹（贈別）惠連」に「方作雲峯異、豈伊千里別（方に雲峯の異を作す、豈伊れ千里の別れならんや）」、「休上人（別怨）」に「日暮碧雲合、佳人殊未來（日暮 碧雲合するも、佳人は殊未來たらず）」とあるうちの「雲」を含む句は、当該詩と同じく全て第三句である。「雲」が何ら変哲のない景物であるために単に多用されたに過ぎない（各詩の第三句に限定しなければ、「雲」の用例数はさらに増える）ともいえようが、以上の用例数（六例）から察するに、偶然とはいい切れない要素を含んでいるような印象を受ける。意図的であるか否かは別としても、江淹という一人の作者によつて三十首という決して少なくない数の詩が制作されたことを素因として顕現した、構成上の癖とでも見なしておくべきか。

05 06 【青松挺秀萼 蕙色出喬樹】

李善曰、広雅曰、秀、美也。鄭玄詩箋曰、承花者曰鄂。
与・同。

鈔曰、青松、論真性也。挺、時秀之貌。萼、蕊床、謂松花也。惠、愛也。色出在樹上、可愛勝也。

音決、萼、魚各反。

張銑曰、萼、花也。惠、媚。喬、高也。
今案、鈔・五家・陸善經本、蕙為惠。

李善曰く、広雅に曰う、秀は、美しきなりと。鄭玄の詩箋に曰う、花を承くる者を鄂と曰うと。萼と鄂とは同じと。

鈔に曰う、青松は、真性を論うるなり。挺は、時秀の貌。萼は、蕊の床、松花を謂うなり。惠は、愛なり。色出でて樹上に在るは、愛す可き勝なりと。

音決に、萼は、魚各の反と。

張銑曰く、萼は、花なり。惠は、媚び。喬は、高きなりと。

今案ずるに、鈔・五家・陸善經本は、蕙を惠に為る。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、
「善曰」（「李」字無し）（明州本・秀州本・建州本）

○鄭玄詩箋曰 「鄭玄毛詩箋曰」（秀州本）

○与・同 「鄂与萼同」（尤刻本・胡刻本・国子監本・
明州本・秀州本・建州本）

○張銑曰 「銑曰」（「張」字無し）（陳八郎本・明州本・
秀州本・建州本）

○萼、花也 「青松喻真性。秀、美。萼、花也」（陳八郎
本）、「青松喻真性。秀、美。萼、花」（「也」字無し）（明州
本・秀州本）、「青松喻真性。萼、花」（「也」字無し）（建州
本）

○惠、媚 「惠、媚也」（陳八郎本）

○喬、高也 「喬、高」（「也」字無し）（陳八郎本）

〔訳〕

李善はいう、「『広雅』にいう、秀とは、美しいというこ
とであると。鄭玄の詩箋にいう、花びらを承ける部分を鄂
という。萼と鄂とは同じである」と。

鈔にいう、「青松とは、本性の喩えである。挺とは、その
時に当たつて秀でている様子をいう。萼とは、蕊の底の部
分であり、松の花をいう。惠とは、愛らしい様子のごとで
ある。色鮮やかな花が樹木に咲いているのは、愛でるべき
景勝である」と。

『音決』にいう、「萼は、魚各の反である」と。

張銑はいう、「萼とは、花のことである。惠とは、美しい
様子をいい、喬とは、高いことである」と。

今考えてみるに、鈔・五家・陸善経本は、蕙を惠に作つ
ている。

〔注〕

① 広雅曰：『広雅』卷一・積詰一に該当箇所がある。

李善注の「秀」は「琇」に作るのが正しい。ただし「琇」
と「秀」とは通ず（『広雅疏証』による）。

② 鄭玄詩箋曰：『詩経』小雅・鹿鳴之什「常棣」に、

「常棣之華、鄂不韡韡。凡今之人、莫如兄弟（常棣の華、
鄂不 韡韡たり。凡そ今の人、兄弟に如くは莫し）」（全八
章中の第一章）とあり、第二句に付された鄭箋に、「承華者

曰鄂。不、当作拊。拊、鄂足也。得華之光明、則鞞鞞然盛（華を承くる者を鄂と曰う。不は、当に拊に作るべし。拊は、鄂足なり。華の光明を得れば、則ち鞞鞞然として盛んなり）」と見えている。詩は、萼に花びらが集まる様子をもつて、親を同じくする兄弟に喩えているのである。ただし当該詩に同様の比喩を認める必要性はない。

③ 蕙為惠 「蕙」と「惠」は、草冠の有無を異にするだけで字体が似通っており、また、「蕙色」「惠色」という熟語について、ともに先行用例が見当たらないため、にわかには定めがたい。「蕙」は『楚辞』にしばしば登場する。『文選』に収録されているものでいえば、屈原「離騷經」（卷三十二）、同「九歌四首」（同）、同「九歌二首」（卷三十三）、宋玉「九弁五首」（同）、同「招魂」（同）といった作品に「蕙」が用いられている。他の『文選』所収作品における「蕙」字の用例も少なくない。一例として司馬相如「上林賦」（卷八）に、「揜以緑蕙、被以江薜（揜おほうに緑蕙を以てし、被らすに江薜を以てす）」とあり、その李善注に、「張揖曰、……蕙、薰草也。郭璞山海經曰、蕙、香草、蘭屬也（張揖曰く、……蕙は、薰草なりと。郭璞 山海經に曰う、蕙

は、香草、蘭の属なりと）」と見えている。香り草である「蕙」が蘭に近い生態を持っていたとするならば、それが当該詩にいうところの「喬樹」を越え出るような高い位置に花を咲かせていたと解釈するのは不自然ではないか。ただし、「蕙色」の語は江淹自身の他の作品に用例があり、その点は注目に値する。「梁王兔園賦」（『芸文類聚』卷六十五・園）に「於是大夫之徒、称詩而帰。春陽始晚、朱華未稀。卒逢邯鄲之女、蕙色玉質。綺裳下見、錦衣上出（是に於いて大夫の徒は、詩を称えて帰る。春陽 始めて晩れて、朱華未だ稀ならず。卒に邯鄲の女の、蕙色 玉質なるに逢う。綺裳は下に見え、錦衣は上に出づ）」と見えている。美しい女性の比喩として、ここでは「蕙色」の語が用いられている。してみると、江淹の用いる「蕙」が蘭に属する具体的な特定の植物であると考える必要はなく、ひいては当該詩において「蕙」と「惠」のどちらが適当かについては、判断を保留せざるをえない。あるいはこの場合は、二字の間に解釈上の偏差を想定する必要はないのかもしれない。当該詩以外の「雜体詩三十首」中に「蕙」字の用例を求めるとすれば、「古離別」に、「不惜蕙草晚、所悲道里寒（蕙草の晩

るるを惜しまず、悲しむ所は道里の寒きなり) (全十四句中の第七・八句)、あるいは「陳思王(贈友)曹植」に、「褰裳摘明珠、徙倚拾蕙若(裳を褰げて明珠を摘り、徙倚して蕙若を拾う) (全十八句中の第十一・二句)と詠じられているが、当該詩と同じように案語が付された例としては、「潘黄門(述哀)岳」が挙げられる。すなわち、「明月入綺窓、髣髴想蕙質(明月 綺窓に入り、髣髴として蕙質を想う) (全二十四句中の第十一・二句)の二句について、集注に、「今案、陸善経本、蕙為惠(今案ずるに、陸善経本は、蕙を惠に為る)」というのがそうである。「潘黄門(述哀)岳」における「蕙」字については、花岡亜希『『文選集注』江淹「雜体詩」訳注・潘黄門(述哀)岳』(『筑波中国文化論叢』第二十九号、二〇一〇)にも考察が施されている。李善はこの詩の「蕙」を「蘭」と同類であると見なしているが、花岡氏はその点について、李善の引く用例による限り、「蕙」が「蘭」であるとするには不十分であると述べている。

○殷仲文「南州桓公九井作」(『文選』卷二十二)には、「何以標貞脆、薄言寄松菌(何を以てか貞と脆とに標さん、薄か言に松と菌とに寄す)」(全二十句中の第十一・二句)と

いうように松が詠じられている。「松」は「貞」と、「菌」は「脆」とそれぞれ対応している。

07 08 【極眺清波深 緬映石壁素】

李善曰、韋昭国語注曰、緬、猶邈也。

鈔曰、極、遠也。眺、望也。謂東陽城前溪水波也。緬、亦遠也。映松山相蔭映、青白皎然也。石壁、山中石崖。直上如壁。素、白也。言遠望見之。

音決、緬、亡善反。

張銑曰、眺、視也。

李善曰く、韋昭の国語注に曰う、緬は、猶邈かなるがごときなりと、と。

鈔に曰う、極は、遠きなり。眺は、望むなり。東陽城前の溪水の波を謂うなり。緬は、亦た遠なり。松山に映じて相い蔭映し、青白 皎然たるなり。石壁は、山中の石崖。直上は壁の如し。素は、白なり。遠望して之を見るを言う

と。

音決に、緬は、亡善の反と。

張銑曰く、眺は、視るなりと。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（「李」字無し）（明州本・秀州本・建州本）

○注 「註」（建州本）

○緬、猶邈也 「緬、邈也」（「猶」字無し）（尤刻本・胡

刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○張銑曰 この三字無し（陳八郎本）、「銑曰」（「張」字

無し）（明州本・秀州本・建州本）

○眺、視也 「眺、視。緬、遠也」（秀州本）、「眺、視。

緬、遠」（「也」字無し）（陳八郎本・明州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、「韋昭の『国語』注にいう、緬とは、邈はかといふようなものである」と。

鈔にいう、「極とは、遠いということである。眺とは、望

むということである。東陽城郭の前を流れる谷川の波を詠じている。緬というのもまた遠いということである。（波は）松山に映じてたがいに照り映え、青と白が明るく光っている。石壁とは、山の中にある石の崖のことである。その上方は壁のように切り立っている。素とは、白のことである。遠くを眺めてこうした光景を見るということをいっている」と。

『音決』にいう、「緬は、亡善の反である」と。

張銑はいう、「眺とは、視るということである」と。

〔注〕

①韋昭国語注曰： 該当する韋昭の注が付されているのは、『国語』楚語上の「彼懼而奔鄭、緬然引領南望曰、庶幾赦吾罪（彼は懼れて鄭に奔り、緬然として領うしろを引いて南望して曰く、庶幾くは吾が罪を赦さんと）」という一文である。これは伍子胥の祖父としても知られる椒舉が鄭に出奔し、遠く南を望んで許しを請うたことを述べるものである。『文選』の校勘各本は「猶」字を欠くが、集注本の引用が正しい。当該詩以外の「雑体詩三十首」における「緬」の用例

としては、「王侍中（懷徳）粲」に「嶠函復丘墟、冀闕緬縦横（嶠函は復た丘墟、冀闕は緬として縦横）」（全二十四句中の第五・六句）と見えている。これは潘岳「征西賦」（『文選』卷十）の「冀闕緬其堙尽（冀闕 緬として其れ堙尽す）」という表現を踏まえたものとされており、「緬」字について李善は、「緬、尽貌也（緬は、尽くる貌なり）」と注を付している（詳しくは荒井禮『『文選集注』江淹「雑体詩」訳注…王侍中（懷徳）粲』（『筑波中国文化論叢』第二十九号、二〇一〇）を参照）。以上の解釈に従うならば、用例数こそ少ないものの、江淹は「雑体詩三十首」における「緬」字を一律に用いていたわけではないことがうかがえる。なお、殷仲文「送東陽太守詩」（『芸文類聚』卷二十九・別上）には、「虚亭無留賓、東川緬逶迤（虚亭 留賓無し、東川 緬かに逶迤たり）」というように、「緬」字が「遠く」の意味で用いられている。「緬」字以外の共通項が少ないため、確定的なことはいえないが、あるいはこの詩句が江淹の念頭にあったのかもしれない。

○「雑体詩三十首」中の一首である「謝臨川（遊山）靈運」に、「桐林帶晨霞、石壁映初晰（桐林 晨霞を帯び、石

壁 初晰に映ず）」（全二十八句中の第九・十句）と詠じられており、後半の句は当該詩の第八句と語句が類似している。当該詩の句について李善がしばしば謝靈運の詩を引いていることから明らかのように、当該詩は各所で謝詩を意識的に踏まえている。従って、以上に述べた雑体詩中の二句の類似も偶然ではないだろう。

09 10 【瑩情無余滓 扠衣积塵務】

李善曰、広雅曰、瑩、磨也。説文曰、滓、澱也。謂鄙穢也。左氏伝曰、叔嚮扠衣従之也。

鈔曰、瑩、磨飾也。莊子云、人之去穢累、若鏡之見磨飾。积、散也。又云、棄也。塵、俗事。言出俗事昏暗之中也。

音、瑩、烏暝反。或為瑩同。滓、側擬反。

張銑曰、瑩、磨。滓、穢也。言遠視山水、瑩磨滓穢而解塵俗之事也。

李善曰く、広雅に曰う、瑩は、磨くなり。説文に曰う、

滓は、澱なりと。鄙穢なるを謂うなり。左氏伝に曰う、叔嚮は衣を払いて之に従うなりと、と。

鈔に曰う、瑩は、磨飾するなり。莊子に云う、人の穢累を去ること、鏡の磨飾を見すが若しと。積は、散らすなり。又云う、棄つるなりと。塵は、俗事。俗事 昏暗の中より出づるを言うなりと。

音（決）に、瑩は、烏暝の反。或いは瑩と為して同じ。滓は、側擬の反と。

張銑曰く、瑩は、磨く。滓は、穢なり。言うところは遠く山水を視て、滓穢を瑩磨して塵俗の事を解くなりと。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○也 この字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○叔嚮払衣従之也 「叔向払衣従之」（「也」字無し）（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○張銑曰 この三字無し（陳八郎本・明州本・秀州本・

建州本）

○言遠視山水 「言遠土視山水」（陳八郎本）

○也 この字無し（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、「『広雅』にいう、瑩とは、磨くということであると。『説文』にいう、滓とは、澱のことであると。にごつて汚いものをいう。『春秋左氏伝』にいう、叔向は衣服をまくつて詰め寄つたと」と。

鈔にいう、「瑩とは、磨いてきよめることである。『莊子』にいう、人が俗世の煩わしきから遠ざかるのは、磨かれた鏡のきれいな面が表れるようなものであると。積とは、散らすことであり、また、棄てることであるともいう。塵とは、俗事のことである。くらぐらとした俗事の中から抜け出すことをいう」と。

『音決』にいう、「瑩は、烏暝の反である。あるいは瑩と同じである。滓は、側擬の反である」と。

張銑はいう、「瑩は磨くということであり、滓は汚いものことである。遠く山水を眺めやって（心中の）汚い部分

を磨き上げ、世俗の煩雑さから解き放たれるということ
を詠じている」と。

〔注〕

① 広雅曰： 『広雅』卷三上・釈詁に該当する記述がある。

② 説文曰： 『説文解字』第十一篇上・水部に、「滓、澱也。从水、宰声（滓は、澱なり。水に从う、宰の声）」とある。

③ 左氏伝曰： 『春秋左氏伝』襄公二十六年の伝に李善の引く一節がある。晋の叔向は、使者に選ばれなかつた子朱に詰め寄られて、それへの返答として次のようにいったという。「叔向曰、「秦・晋不和久矣。今日之事、幸而集、晋国頼之。不集、三軍暴骨。子員道二国之言無私、子常易之。姦以事君者、吾所能御也」。扞衣従之。人救之（叔向曰く、「秦・晋 和せざること久し。今日の事、幸いにして集らば、晋国 之に頼らん。集らずんば、三軍 骨を暴さん。子員は二国の言を道いて私無く、子は常に之を易う。姦にして以て君に事うる者は、吾能く御ぐ所なり」と。衣を扞

いて之に従う。人之を救う）。簡単に意見を変更する子朱には、重要な外交の使者を任せるわけにはいかないことを主張したのである。「扞衣」について、「正義」には、「扞者、披迅之義、以其將闘、知扞衣即褰裳也。対則上衣下裳、散則可以相通、故以褰裳解扞衣（扞うとは、披くこと迅きの義、其の將に闘わんとするを以て、衣を扞うは即ち裳を褰ぐるなるを知るなり。対は則ち上衣 下裳、散なれば則ち以て相い通ず可し、故に裳を褰ぐるを以て衣を扞うを解く）」という。闘う姿勢を示すために衣服を素早くまくることをいうのであろう。『春秋左氏伝』の用例が、怒りの感情を伴う仕草であるとすれば、当該詩の直接の典故とは考えにくい。『文選』中の他の作品にも「扞衣」の語は見受けられる。祖の謝玄について述べた謝靈運「述祖德詩二首」（其二）（卷十九）の末尾の六句に、「高揖七州外、扞衣五湖裏。随山疏濬潭、傍巖薺粉梓。遺情捨塵物、貞觀丘壑美（高く七州の外に揖し、衣を五湖の裏に扞う。山に随いて濬潭を疏し、巖に傍いて粉梓を薺う。情を遺れて塵物を捨て、丘壑の美を貞觀す）」（全二十句）と詠じられている。衣服を扞うてかつて范蠡が身を退けた五湖（≠太湖）へと去り、俗情を

忘れて「丘壑の美」を鑑賞するというのであるから、この場合は当該詩と発想が近い。謝靈運の「弘衣」の句は、「述祖徳詩二首」(其一)の、「委講綴道論、改服康世屯(講を委すてて道論を綴ゆめ、服を改めて世屯せいちゆんを康かんんず)」と対応している。二句は、衣服を改めて謝玄が左將軍となり、苻堅を討伐したことを詠じている。殷仲文自身にも「弘衣」の用例が見出せる。「解尚書表」(『文選』卷三十八)に、「昔桓玄之世、誠復驅迫者衆。至於愚臣、罪実深矣。進不能見危授命、忘身殉国。退不能辞粟首陽、弘衣高謝(昔桓玄の世、誠に復た驅迫せらるる者衆おほし。愚臣に至りては、罪実に深し。進んでは危きを見て命を授け、身を忘れて国に殉ずる能わず。退いては粟を首陽に辞し、衣を払って高く謝する能わず)」とあるのがそれに当たる。かつて桓玄に仕えていた時分には、衣服の塵を払って隠退することなどできなかったと述べている。「弘衣」が否定形で記されているのは、当該詩と対照的である。江淹が同表を参照していたとすれば、「弘衣」を肯定形で詠じたところに工夫があると考えられるかもしれない。

④ 莊子云： 前掲長谷川滋成「『文選鈔』の引書」は、「現

存の書物に見えぬもの、および輯本等に収録されていないもの」の一つとして、ここに引かれている『莊子』の一節を挙げている。

1112【求仁既自我 玄風豈外慕】

李善曰、論語曰、求仁而得仁、又何怨乎。漢書灌嬰曰、侯自我得之。玄風、謂道也。李(見世道)々々 充玄宗賦曰、慕玄風之遐裔、余皇祖曰伯陽。謝靈運憶山中詩曰、得性非外求。鈔曰、仲文發此語者、欲明己不助桓玄、以忠言諫不得也。故云守於道教。豈可外慕於世事榮華哉。玄、道也。風、教也。仲文被出為東陽太守、不得志、故發此言也。

李周朝曰、求為仁道、則從我(身)玄遠之風。豈在外慕而得之也。

李善曰く、論語に曰う、仁を求めて仁を得、又何をか怨まんやと。漢書に灌嬰曰く、侯 我自り之を得と。玄風は、道を謂うなり。李充の玄宗の賦に曰う、玄風の遐裔を慕い、

余が皇祖を伯陽と曰うと。謝靈運の山中を憶うの詩に曰う、
性を得るは外に求むるに非ずと、と。

鈔に曰う、仲文 此の語を發するは、己の桓玄に助けられず、忠言を以て諫むるも得ざるを明らかにせんと欲するなり。故に道教を守るを云う。豈外に世事の榮華を慕う可けんや。玄は、道なり。風は、教えなり。仲文 出だされて東陽太守と為り、志を得ず、故に此の言を發するなりと。

李周翰曰く、仁為る道を求むれば、則ち我が身の玄遠の風に従う。豈外に在りて慕いて之を得んやと。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（「李」字無し）（明州本・秀州本・建州本）

○又何怨乎 「又何怨」（「乎」字無し）（建州本）

○李周朝曰 「翰曰」（「李周」の字無し）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○之也 この二字無し（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、「論語」にいう、仁を求めて仁を獲得したのだから何を怨めしく思うことがあるか。『漢書』に灌嬰がいう、侯の爵位は自ら求めてえたものであると。玄風とは、道のことをいう。李充の「玄宗賦」にいう、玄学の風潮を受け継いだ後裔を思慕し、我が祖先を伯陽（老子）という。謝靈運の「道路にて山中を憶う」詩にいう、本性の獲得は外界に求めるものではないと。

鈔にいう、「殷仲文がこの句を詠じたのは、自分は桓玄の助けをえられず、忠言によつて諫めたものの、それも取り上げてはもらえなかつたことを明らかにしようとしているのである。だから道の教えを守ることを詠じているのである。どうして外界の世間的な榮華に思いを寄せることなどがあるか。玄とは道であり、風とは教えを指している。殷仲文は左遷されて東陽太守となり、志を果たせなかつたためにこうした詩句を詠じたのだ」と。

李周翰はいう、「仁であることの道を求めるならば、自身の内側にある玄妙な風趣に従うべきである。外界に思いを寄せて仁を得ようとする必要などないではないか」と。

〔注〕

① 論語曰：『論語』述而篇に、「冉有曰、「夫子為衛君乎」。子貢曰、「諾。吾將問之」。入曰、「伯夷・叔斉何人也」。曰、「古之賢人也」。曰、「怨乎」。曰、「求仁而得仁、又何怨」。出曰、「夫子不為也」（冉有曰く、「夫子は衛の君を為なくるか」と。子貢曰く、「諾。吾將に之を問わんとす」と。入りて曰く、「伯夷・叔斉は何人ぞや」と。曰く、「古の賢人なり」と。曰く、「怨みたるか」と。曰く、「仁を求めて仁を得たり、又何をか怨まん」と。出でて曰く、「夫子は為なげざるなり」と）と見えている。伯夷・叔斉は怨めしい思いを抱いていたかと子貢に問われて、孔子は、仁を求めて仁を獲得したのだからそのような感情があったはずはないと述べる。『文選』所収の詩における類型表現としては、阮籍「詠懷詩十七首」（其六）（卷二十三）に、「求仁自得仁、豈復歎咨嗟（仁を求めて自ら仁を得れば、豈復た歎きて咨嗟せんや）」と詠じられている。「得仁」が、孔子の伯夷・叔斉評に用いられているのであつてみれば、それは常人には容易になしえない行為であつたと考えられよう。それだけに、阮籍の「自ら仁を得」、当該詩の「既に我自りす」といった、伯夷

・叔斉を想起させながらも、「自ら」「我自りす」という言辞を用いて作中の自己を主体とする表現は、自負に支えられた明確な主張を背後に秘めているように読める。当該詩はあるいは『論語』のみならず、阮籍の詩をも間接的に踏まえていると見なせるかもしれない。なお殷仲文「南州桓公九井作」（『文選』卷二十二）には、「伊余樂好仁、惑祛吝亦泯（伊れ余 仁を好むを樂しみ、惑い祛とりて吝も亦た泯く）」（全二十句中の第十七・八句）というように仁への言及がある。

② 漢書灌嬰曰：『漢書』卷五十二・灌夫伝。酒席での灌夫の不敬を救うために灌嬰が主上に上書しようとする場面に李善所引の一節がある。前後も合わせて引いておくと次のようになる。「嬰銳為救夫。嬰夫人諫曰、「灌將軍得罪丞相、与太后家迕、寧可救邪」。嬰曰、「侯自我得之、自我捐之、無所恨。且終不令灌仲孺独死、嬰独生」。乃匿其家、竊出上書（嬰は鋭くして夫を救うを為さんとす。嬰の夫人諫めて曰く、「灌將軍は罪を丞相に得、太后の家と迕たがう、寧ぞ救う可けんや」と。嬰曰く、「侯は我自り之を得、我自り之を捐つるも、恨む所無し。且つ終に灌仲孺をして独り死

せしめて、嬰独り生きず」と。乃ち其の家に匿れ、竊かに上書を出だす」。灌嬰は、侯の爵位は自分自身でえたものであるから、灌夫をかばうことでそれを失ってもかまわなと述べているのである。『文選』所収の詩における「自我」の用例としては、謝靈運「述祖德詩二首」(其一)(卷十九)の冒頭に、「達人貴自我、高情属天雲(達人 自我を貴び、高情 天雲に属す)」と詠じられており、その李善注に、『呂氏春秋』曰、陽朱は己を貴ぶと。高誘曰く、天下を軽んじて己を重んずるなりと」とある。「達人」たるにふさわしい人物は、天下国家の運営を軽視し、あくまで自己の涵養に努めるものだというのである。

③玄風 李善は道そのものと解するが、玄学の風潮を意味することもある。『文選』中の用例としては他に例えば、沈約「宋書謝靈運伝論」(卷五十)に、「在晋中興、玄風独扇、為学窮於柱下、博物止乎七篇。馳騁文辞、義殫乎此。自建武暨于義熙、歴載将百。雖比響聯辞、波属雲委、莫不寄言上德、託意玄珠。遒麗之辞、無聞焉爾。仲文始革孫・許之風、叔源大變太元之氣(晋の中興に在りて、玄風独り扇

んに、学を為すは柱下に窮まり、物に博きは七篇に止まる。文辞を馳騁するも、義は此に殫く。建武自り義熙に暨び、載を歴ること将に百にならんとす。比響 聯辞は、波のごと属なり雲のごと委うと雖も、言を上德に寄せ、意を玄珠に託さざる莫し。適く麗しき辞は、焉を聞く無し。仲文始めて孫・許の風を革め、叔源大いに太元の氣を變ず」と見えており、李善は『統晋陽秋』曰、正始中、王弼・何晏好莊子玄勝之談、而俗遂貴焉(『統晋陽秋』に曰う、正始中、王弼・何晏は莊子玄勝の談を好みて、俗は遂に焉を貴ぶ)と注を付している。沈約は、殷仲文が「孫・許の風」、すなわち孫綽や許詢が得意としたような玄学風の文学的流行を改めたと述べており、江淹が殷仲文にふさわしいものとして「玄風」の語を用いているのは理解が異なっているといえよう。なお、「玄風」は、『詩品』や『文心雕竜』においても文化的・文学的な風潮を表す語彙として用いられている。ここでは「鈔」に従って「道の教え」と訳しておく。

④李充玄宗賦曰… 佚文。嚴可均「全晋文」は当該詩の注に引かれている二句を載せるのみ。李充は字を弘度という。『晋書』卷九十二・李充伝に、「于時典籍混乱。充删除

煩重、以類相從、分作四部。甚有条貫、秘閣以為永制（時に于いて典籍混乱す。充 煩重を删除し、類を以て相い従い、分ちて四部と作す。甚だ条貫有りて、秘閣以て永制と為す）」とあるように、現在では散逸してしまった『晋元帝書目』において四部分類の順序（経部・史部・子部・集部。李充自身はそれぞれを甲・乙・丙・丁と名づけていた）を定めた。また、同じく本伝に、「充注尚書、及周易旨六篇、積莊論上下二篇、詩賦表頌等雜文二百四十首、行於世（充尚書に注し、及び周易旨六篇、積莊論上下二篇、詩賦表頌等雜文二百四十首、世に行わる）」と述べられているように、儒家から道家まで幅広く古典を学んだようである。賦の題にいう「玄宗」は、例えば王儉「褚淵碑文并序」（『文選』卷五十八）に「眇眇玄宗、萋萋辭翰（眇眇たる玄宗、萋萋たる辭翰）」とあり、李周翰は「玄宗、道也（玄宗は、道なり）」と注を付している。賦中にいう「伯陽」は老子。応璩「与滿公琰書」（『文選』卷四十二）に、「夫漳渠西有伯陽之館、北有曠野之望（夫れ漳渠は西に伯陽の館有り、北に曠野の望有り）」とあり、李善注に、「伯陽、即老子也（伯陽は、即ち老子なり）」と見えている。韻文における「玄風」

の語の先行用例として、李善は李充の賦を引いたものと考えられる。なお、道家的な発想に基づく語彙を詩語として定着させるのが、江淹の作風の顕著な傾向となっている点については、高橋和巳「江淹の文学」（『高橋和巳作品集九 中国文学論集』河出書房新社、一九七二）に指摘がある。

⑤ 謝靈運憶山中詩曰：謝靈運「道路憶山中（道路にて山中を憶う）」（『文選』卷二十六）に、「得性非外求、自己為誰纂（性を得るは外に求むるに非ず、自ら己むのみにして誰が為にか纂がん）」（全二十二句中の第十一・二句）と詠じられており、李善は次のように注を付している。「言得性之理、非在外求、取足自止、為誰之所継哉。言不為人之所継也（言うところは性を得るの理は、外に求むるに在るに非ず、足るを取りて自ら止め、誰が為の継ぐ所ならんや。言うところは人の為の継ぐ所ならざるなり）」。

⑥ 玄遠 奥深い様子。『晋書』卷四十九・阮籍伝に、「籍雖不拘礼教、然發言玄遠、口不臧否人物（籍礼教に拘らずと雖も、然るに言を發すること玄遠にして、口に人物を臧否せず）」とある。なお、『世説新語』德行篇などにも、「玄遠」の語を含んだ同様の記述がある。

13 14 【直置忘所宰 蕭散得遺慮】

李善曰、淮南子曰、成化像而弗宰。高誘曰、宰、主也。謝靈運越嶺溪行詩曰、觀此遺物慮、一悟得所遣。

鈔曰、直置、專一之義也。去外物專於道、故云忘所主。

虛心悟志、無有所主、即道之本也。蕭散、空遠無関也。既眺望遠覽、可以適性、故棄其思慮之事、不有憂懷也。

呂延濟曰、蕭散、空遠也。言直置專一、忘其所主者、道之本也。能縦心、空遠遺其思慮者、則近之也。

陸善経曰、直置、任真。蕭發、自放遺於思慮。

李善曰く、淮南子に曰う、化像を成して宰らずと。高誘曰く、宰は、主るなりと。謝靈運の嶺を越えて溪行すの詩に曰う、此れを觀て物慮を遺れ、一悟遣る所を得と。

鈔に曰う、直置は、專一の義なり。外物を去りて道を専らにす、故に主る所を忘ると云う。心を虚にして志を悟ら

ば、主る所有る無し、即ち道の本なり。蕭散は、空遠にして関わる無きなり。既に眺望遠覧すれば、以て性に適う可し、故に其の思慮の事を棄てて、憂懷有らざるなりと。

呂延濟曰く、蕭散は、空遠なるなり。言うところは直置專一にして、其の主る所を忘るるは、道の本なり。能く心を縦にして、空遠にして其の思慮なる者を遺るれば、則ち之に近づくなりと。

陸善経曰く、直置は、真に任す。蕭散は、自ら放ちて思慮を遺ると。

〔校勘〕

○李善曰 この三字無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（「李」字無し）（明州本・秀州本・建州本）

○成化像而弗宰 「成化象而弗宰」（尤刻本・胡刻本・国

子監本・明州本・秀州本・建州本）

○呂延濟曰 「濟曰」（「呂延」の字無し）（陳八郎本・明

州本・秀州本・建州本）

○蕭散、空遠也 「宰、主也。蕭散、空遠也」（陳八郎本

・明州本・秀州本）

○也 この字なし（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、「『淮南子』にいう、（道は）万物を生成するが専有はしないと。（『淮南子』に注して）高誘はいう、幸とは主るといふことであると。謝靈運の「嶺を越えて溪行す」詩にいう、山水を観覧して世間的な煩わしさを忘れ、そうすると悟りが開けて解放的な境地をえた」と。

鈔にいう、「直置とは、ひたすらにという意味である。外界の名利を取り除いて道に専心するがゆえに、外的な束縛を忘れるという。心を虚ろな状態にしてそれによって志を悟ったならば、自己を専有し束縛するものなどなくなる、これこそが道の根本である。蕭散とは、はるかに遠くして関わるものとしてないということである。遠くを眺めやれば本性に適合するはずであり、だからこそ内心の思慮を棄てて、憂いがなくなるのである」と。

呂延濟はいう、「蕭散とは、はるか遠いということである。ひたすらに自己を束縛するものを忘れるのが道の根本であることを述べている。思うままに心を遠く解き放って煩わ

しい思慮を忘れたならば、道に接近できるのである」と。
陸善経はいう、「直置というのは、真髓にゆだねることである。蕭散とは、自ら（心を）解き放って（煩わしい）思慮を忘れることである」と。

〔注〕

①淮南子曰：『淮南子』原道訓に、「夫太上之道、生万物而不有、成化像而弗宰、跛行喙息、蠓飛蠕動、待而後生、莫之知徳、待之後死、莫之能怨（夫れ太上の道は、万物を生じて有せず、化像を成して宰らず、跛行 喙息、蠓飛蠕動も、待ちて後に生じて、之を徳なるものと知るもの莫く、之を待ちて後に死して、之を能く怨むもの莫し）」と見えており、李善が引くとおり、「宰」字に関する高誘の注に、「宰、主也（宰は、主るなり）」とある。『淮南子』の一節は、道は万物を生成するが、それを専有することはないということ述べている。だから歩いたり息をしたり飛び回ったりするものどもは、道を徳として強いて称えることもなければ、その逆に怨むこともないのである。『老子』第五十一章に、「生而不有、為而不恃、長而不宰、是謂玄徳（生

じて有せず、為して恃まず、長ぜしめて、宰つぐとらず、是れを玄徳と謂う」とあるのなども含めて、老莊的な価値観からいえば、道における「宰」とは否定の形で表現されるべき要素であつたのだろう。してみると当該詩の第十三句は、「宰る所」はそもそも万物に対する支配力が微弱であるにも関わらず、それすらをも意識的に「忘」れ去ろうとする、語り手の思想的な意味での潔癖を示しているよう。

②謝靈運越嶺溪行詩曰：謝靈運の「從斤竹澗越嶺溪行（斤竹澗よ從り嶺を越えて溪行す）」（『文選』卷二十二）を指す。引用の二句に対する李善注に次のように見えている。

『淮南子』曰、吾独懐慷慨遺物、而与道同出、是故有以自得也。郭象莊子注曰、將大不類、莫若無心。既遣是非、又遣其所遣。遣之以至於無遣、然後無所不遣。而是非去也（『淮南子』に曰う、吾独り慷慨を懐いて物を遣れ、而して道と同に出づ、是の故に以て自得する有るなりと。郭象の莊子注に曰う、將に大ならんとして類せざるは、無心に若くは莫し。既に是非を遣り、又其の遣る所を遣る。之を遣りて以て遣る無きに至り、然る後に遣らざる所無し。而して是非去るなりと）。当該詩と謝靈運の詩とでは、「遺慮」と「遣

物慮」という表現が似通っており、それらの表現は李善が謝靈運の詩に引くところの『淮南子』の記述と密接に関連しているよう。これは、外界の事物に捉われずに道と出処進退をともしにすることで、自得した境地に達することを述べたものである。

③蕭散 思念を忘れた状態。『文選』中の用例は以下のとおり。謝朓「始出尚書省」（卷三十）に、「既乘丹石心、寧流素糸涕。乘此得蕭散、垂竿深澗底（既に丹石の心を乗る、寧ぞ素糸の涕を流さんや。此れに乘りて蕭散を得、竿を深澗の底に垂れん）」（全三十句中の末尾）と詠じられているのは、変わることにない故郷への思いに従って、のんびりと釣り糸を垂れると述べている。あるいは潘岳「哀永逝文」（卷五十七）には、「昔同塗兮今異世、憶旧歎兮增新悲。謂原隰兮無畔、謂川流兮無岸。望山兮寥廓、臨水兮浩汗。視天日兮蒼茫、面邑里兮蕭散。匪外物兮或改、固歎哀兮情換（昔は塗を同じくし今は世を異にし、旧歎を憶いて新悲を増す。原隰を畔無しと謂い、川流を岸無しと謂う。山を望めば寥廓たり、水に臨めば浩汗たり。天日を視れば蒼茫たり、邑里に面すれば蕭散たり。外物の或いは改まるに匪ず、固

より欲哀 情換わればなり」と見えている。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程)

『文選集注』江淹「雜体詩」

(二〇一五年度) 演習参加者 (五十音順)

荒井 禮 (あらい・れい)

荒川 悠 (あらかわ・ゆう)

小田 健太 (おだ・けんた)